

## はじめに

花園大学は、人権教育を教学の大きな柱の一つにしています。これは、本学が過去何度か犯してきた、差別事件の経験を踏まえて形成されてきたものです。カリキュラムとしては、「民族問題論」「部落問題論」「差別問題論」「同和教育論」などが開講されており、「人権週間」の行事も三年前から開催されています。今日の新入生諸君に対する特別講演会も、この人権教育の一環として位置づけられているものです。

本日は、「日本の国際化とアパルトヘイト」という、まさに時宜に即した主題でお話いただきます。民族差別の典型とってよい、南アフリカ共和国の現実をしっかりと知ること、国際化が喧伝される中で一体国際化とは何なのか、どういう中味をもつものなのか、そして、国際化とアパルトヘイトの関係でわれわれ自身何をすることができ、何をしなければならないのか、じっくり考え直してみる機会になればと思います。

お話いただく片岡幸彦先生は、現在、立命館大学国際関係学部の教授で、フランス文学とアフリカ文学の御専門です。『アフリカ 顔と心』などの著書があり、日本人とアパルトヘイトに苦しむ黒人との連帯に尽力されています。

1991年度

花園大学人権教育研究委員会委員長

桐 田 清 秀

## 「日本の国際化とアパルトヘイト」

講師 立命館大学国際関係学部教授

片岡幸彦先生

ただいまご紹介いただきました片岡でございます。同じ京都の大学に勤めております。今回、入学式のこのようなはればれとした席でお話をする機会をいただき、大変光栄に思っています。私どもの国際関係学部にも、皆さんのような新しい方が入ってこられます。このあいだ入学式をしたところですが、皆、希望に燃えた非常に明るい顔をしていました。きょうも壇上から皆さんをうかがっておりますと、これから楽しい夢のある学生生活が始まるのだという顔をしていらっしゃるように思います。

きょうは『日本の国際化とアパルトヘイト』というテーマで、皆さんにお話することになりました。国際化という言葉をご存じでしょうか。この言葉が日本で聞かれるようになりしたのは、1960年代、日本では高度経済成長の時代が始まる頃です。この頃から日本の経済は、海外へ広く出かけていくようになりました。国際化というのは、

英語のインターナショナルという言葉からきています。皆さん、インターナショナルという言葉をご存じですか。インターナショナルという言葉は、実は18世紀にあるイギリスの経済学者が使ったのが初めてだと言われています。そして実際に、この言葉がよく人々の口について出るようになったのが19世紀の半ば、1850、1860年代にあたります。つまり、ヨーロッパでは、日本より百年ぐらいい前からインターナショナルという言葉がよく使われるようになったということを、申しあげておきたいと思います。

インターナショナルのナショナルというのは、ネイションという言葉からきています。ネイションというのは国民あるいは、国家と訳されています。私たちは、現在、国連という国際組織を持っており、159の加盟国がそこに加盟しているのを、政治学のうえではネイション・ステイトが集まっていると、普通は考えているようです。これは国民国家と訳されています。この国民国家（ネイション・ステイト）が、ヨーロッパあるいは世界に出揃うようになるのが、18世紀から19世紀にかけてです。ご承知のように、島国の日本と違いましてヨーロッパは陸続きですから、お互いの交流が非常に盛んになる。つまり、国民国家同士

の交流が盛んになりました。

インターというのは、スポーツをおやりの方はよくご存じでしょうが、インター・カレッジ（学校対抗試合）というのがあります。技を互いに競うという学校間競技。そういうことから、インター・ナショナルということばはきているわけです。

日本は、戦後40年以上たって、今日こういうことになっております。国際化が地球規模に広がっていくのが1980年代、つまりこの十年間の現状だと言っていいかと思えます。そういう意味では、日本は大変めざましい発展を今日遂げているということになります。

皆さんのお手元に簡単なレジメを配っていただきました。きょうは、それに則してお話をしてまいりたいと思いません。

まず日本の国際化と言われますが、具体的には今日どういうことになっているのかということです。第一に、日本人が大挙して観光旅行などで外国へ出かけるようになった。これは大変な数でありまして、毎年30%、40%、50%という勢いで増えています。そして1989年には、一千万人を突破するという状況になっています。法務省の入

管統計によりますと、だいたい19歳から69歳ぐらいまでの、大人の男女合わせて三人に一人は、近くは韓国、香港、ハワイ、遠くはアメリカの東海岸、さらにはヨーロッパ、アフリカまで飛行機に乗って出かけています。

人が他の国に出かけて行く、こういう人の流れ、移動が国際化の尺度を計る指標にされておりますが、一千万人という数は、大変な数です。私はフランスが本来専門なので、何回も行っておりますが、行くたびに、パリの日本人の数の多さにびっくりいたします。

次に、日本は世界一金持ちだと言われるようになりました。どのくらい金持ちなのか。日本が海外に輸出している資金と、海外に会社や工場を持っている、あるいはホテルや不動産などを持っているのを、日本の海外資産と言っています。その額は、約二兆ドル近いという現状です。

二兆ドルというのは、皆さんどのぐらいのお金かおわかりでしょうか。今、世界は、湾岸戦争でもいろいろと話題になりましたが、軍備費が決して少なくない。世界の軍備費が約一兆ドル弱であります。

それから第三世界と言われております、きょうお話する南アフリカなどが借りているお金、アメリカが借金をかかえ

ているという問題はまた別ですけれども、こういう発展途上国を多く抱える第三世界の対外債務の額が、一兆三千万ドルと言われていています。したがって、今非常に問題になっている軍備と対外債務の両方を合わせたのにほぼ近い資産を、日本は海外に持っているという状況です。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどが、毎年のように海外資産を減らしてきているのに反比例するように、日本は海外資産を増やしてきているのです。それだけ日本は、他の国と比べて、お金をたくさん持っているということです。皆さんのふところ、あるいは私のふところ、皆さんのお父さん、お母さんのふところがそうであるかどうかは、また別の問題かもしれませんが……。このいわゆるジャパン・マネーがたくさん海外に出て、海外にいろいろな影響を与えているということになります。

三番目は、日本でつくられたものが世界中を駆けめぐっているという話です。日本もいろいろな物を輸入しますが、日本でつくられた物も商品として、世界のマーケットへどんどん出て行きます。その差し引きが、約一千億ドル。一千億ドル余計に日本は海外に物を輸出しているということです。これがご承知のように、日米経済摩擦やいろいろな

地域でさまざまな経済摩擦を起こしているということになります。

このように、今日日本の人やお金や物が地球のいたる所、その果てまで進出しているのです。これほど急激な国際化を日本が経験したことは、歴史上でかつてなかったことでありますし、かつ世界の他の国もこれほどの水準に達したということは稀なのではないかと思えます。

日本の国際化は、そういうところまできている。まさに地球規模の国際化の時代にいるわけです。グローバリゼーションという言葉も使われています。インターナショナルという言葉とグローバリゼーションという言葉覚えておいてください。

日本の人や物やお金が海外に広く出ていくこと自体を、皆さんは非常にいいことだ、鼻が高い、と思うでしょう。ところが国際社会では、必ずしもそのことが大変すばらしいことだと言われているとは限らないのです。

例えば、私の友人などは商社あるいはメーカーなどの企業の重役クラスですが、そういう人たちから時々聞く話です。これは自慢話のようなものや、やや反省ぎみに言っている話もあります。「最近の日本の人たちは働きすぎだ。



よく働いてもらっている」ので、その労に報いるためにいろいろなレクリエーションを考える。ある一流企業のレクリエーションの例です。これは最近ではなくて、二、三年前の話です。

グループでフィリピンに出かけて行った例です。皆ゴルフバックを持って、成田空港に集合した。ところが成田空港に着きますと、ゴルフバックはコインロッカーに片付けられる。手ぶら同然で飛行機に乗ってフィリピンに着く。フィリピンに着くと、現地でいろいろ楽しいことが待っているという仕組みであります。優秀なエリート社員も、家を出るときは「ゴルフに行ってくるね」と言っているのだそうです。これは一流企業が公然とグループをつくって行ったという例です。これがどの程度、今日の日本の企業で行われているかは調べたわけではありませんが、けっして少なくないのではないかと思います。しかし、そういうものに対する批判もだんだん強くなっていますから、少なくなっているかもしれません。

では、女の方は立派かという、必ずしもそうではありません。皆さんもそろそろ海外旅行に行ってみたいと思われるかもしれません。私の娘は二人とも大学を出ました。

下の娘が最近海外旅行から帰ってきて、こういうことを言っておりました。常々私が聞いていたことでありますから「そうかもしれない」と思いました。

ルイ・ヴィトンというフランスのブランドの革製品がございます。それを買うためにたくさんの日本人が店に列をなしている。非常に異常な光景で、私の娘もそこに並んでいたのですが、途中でやめたそうです。なぜやめたかという、お金を受け取って品物を渡している売り子の顔を見ていると「日本人を軽蔑している顔だとすぐわかったから、私は買う気にならなかった」と言っています。ルイ・ヴィトンという品物を自分のために買うというのであれば、まだいいでしょうが、友達に頼まれたり、近所の人に頼まれて、五つも六つも買っていく。いったい日本人はどうなっているのかというのが、おそらくそういう事実を知った者の率直な感想でしょう。

私はフランスに何回も行きました。フランス人はけっして金持ちでなくはありません。日本人より豊かな生活をしていると私は残念ながら今でも思っております。そういう彼らでも、ルイ・ヴィトンを買えるのはごく少数のお金持ちの人だけです。ところが、日本ではそれほどお金を持っ

ているとは思われない大学生やOL、たかだか10万円とか20万円の給料をもらっているOLがバッグを買っていく。「これはどういうことだろうか。日本人というのとはわからない」ということでもあります。「わからない」というのは半分軽蔑の気持ちをもって言っているわけです。

それから、一時、地上げということがありました。東京の地価は大変な値段であります。京都も大変高くなりました。最近は少しゆり戻して値が下がっているようですが、しかし大変な額です。日本のお金持ちは日本で買う土地がなくなって海外に土地を買いに出かけている。ハワイ、オーストラリアのとくにリゾート地区は、日本人の企業がひしめいているそうです。あるオーストラリアの町では、土地の値段が高くなるので困るというので「日本人には土地を売らない。家を売らない」という条例までつくったそうです。ハワイ市長が警告したという例もだいぶん前の話です。そのように、日本人があちこちで実はひんしゅくをかっているというのが、残念ながら今日のもうひとつの現実です。

日本の土地はアメリカの土地の四倍するそうです。面積が二十五分の一ですから、百倍するということになり、日本の土地は、アメリカで土地を買う百倍のお金を出さない

と買えないということです。土地の値段だけで、日本はアメリカの四倍の資産を持っているということになります。しかし、果たしてこれが日本は金持ちだと言える根拠のある数字でしょうか。一時、株がおおいに下がりました。それによって何十兆円というお金がなくなりました。そういうのをバブル経済と言うのだそうです。

三番目に、日本人は非常によく働くといわれています。日本の商社員や外交官は、海外に約五十万人が常駐していると言われていて、そういう人たちはアフリカにまで行って活躍している。日本の企業戦士たちは、ある意味で大変評判がいいのです。それはなぜかということ、非常に合理的な商売をしているからです。フランス人やイギリス人のように、膨大な利益、コミッションを要求しないという点で、商品は比較的安いし、買った後にアフターケアがあるというので評判でもあります。ところがよく注意して聞いてみますと、半分はほめているのですが、半分は軽蔑しているのです。

それはどういうことかと言いますと、向こうの人は仕事も熱心ですけれども、自分の人生をエンジョイすることにも大いに気を使う人たちです。仕事をパッと離れま

すと、パーティなどをよく開きます。それは会社でやる場合もありますし、個人の家に招いてやる場合もあります。当然、現地の商社員はそこに招かれるということになります。ところが、日本人はそういうところで話題がない。文化の話ができない。「商売は大変合理的で上手だけれども、いったいこの人は何を考えて生きているのかわからない。不思議な国民だ」というわけです。

自分たちのマーケットがだんだん浸食されるというやっかみからかかもしれませんが、ECの代表団が数年前日本に来たときに、日本人はなかなか豊かだというけれども、住んでいるところはうさぎ小屋だと言ったことが有名になりました。

そしてそのころ、日本人はエコノミックアニマルだと言われるようになりました。エコノミックアニマルというのは大変失礼な言葉であります。フランスでも、かつて非常な勢いで豊かになっていった時代がありました。戦後のアメリカが、世界の経済・政治をリードしたように、だいたい十八世紀の中葉から十九世紀の中葉までは、イギリスとフランスの時代だったのです。とくに二十世紀前後はポンドとフランが世界の通貨でありました。いたるところに

彼らの顔がありました。その時代に、ある人が、そういう経済活動、お金儲けのためのイギリス人、フランス人のことをホモエコノミックスと言って批判したことがあります。ホモエコノミックスというのは、ラテン語で経済人間という意味です。経済のことだけしか考えない、お金儲けのことだけしか考えない人間というので批判したわけです。しかし経済人間ではありますが、人間であってアニマルではないのです。日本はよほどひどい侮辱を受けたということになります。しかし、私たちはその言葉を聞いてどれほど真剣に怒ったでしょうか。私などもけしからんと思いましたが、ただちに抗議したかというところではありません。どうもそういうことに対して少し鈍感になっているのかもしれない。

世界一金持ち、物持ちの日本に対する国際社会に非難がもっとも大きく広がったのが1998年のことであります。ちょうどその前の十二月に国連の反アパルトヘイト特別委員会の委員長が「日本は国連がこれまでアパルトヘイトについて非難をしている南アフリカ共和国と約四十二億ドルという世界一の貿易額に達している。けしからんではないか。アメリカが南アフリカから企業を引き上げているのに、

そのあとをねらうようにして日本は南アフリカに進出している。まるで火事場泥棒ではないか」ということで叩かれます。さすがに日本の外務省や通産省もこのような非難を受けて、経済団体連合など経済界に自粛を呼びかけました。

1988年はかなり努力をしたようですが、自由経済という建前を守るということで、具体的にはどこの企業もそれほどの努力はしなかったようです。1988年から一年後の12月に国連総会で、依然として南アフリカに対する貿易が少なくなっていないということで、日本は国連総会で初めて名指しで非難されたという不名誉なことがございました。

日本の外務省は大変残念だということで、その年には努力が多少実って、第一位の地位を西ドイツに譲ることができました。12月の末になってやっとそういう結果になったわけです。しかし考えてみますと、42億ドル近いのが40億ドルちょっとに減っただけですから「たいして変わりはないではないか」と国際社会の多くの人たちが思ったとしても止むを得ない状況のように思います。今日ではどのぐらいになっているのか正しい数字は現在まだつかんでおりませんが、少しは減っておりますけれど、40億ドル

を大きく減少している状況ではないと思います。

では、いったいどうしてそういうことがいつまでも続くのでしょうか。またアパルトヘイトについて私たちはどれだけ認識しているのでしょうか。いずれにしろ「たいしたことはないのではないか」と高をくくっているように見えます。私も日本の企業の門を叩いたことがございますが、企業人の対応を見ておきますと、申し訳ないことをしているというふうでは決してなかったように思います。

普通、アパルトヘイトというのは人種隔離政策と訳されています。南アフリカ共和国は黒人が圧倒的に多く、白人は15%足らずです。この白人は十七世紀にオランダからこの国にやってまいりました。やってまいりましたのは偶然です。その前に大航海時代というのがありまして、最近、湾岸戦争でアラビア、イスラームのことが皆さんに少しわかってきて関心が少しあるかもしれませんが、あそこにいる人たちはみな農民としてではなく貿易商人としてずっと長い間生きてきた都市文化の民族であります。そういう間を通過して、インドの絹や胡椒などヨーロッパ人が非常に珍重したものが輸入されていたわけです。そういうものを直接自分たちが安く手に入れたいというので始まったのが大



航海時代です。1492年にコロンブスがアメリカ大陸を発見したところ、南アフリカの希望岬を通してインド洋、カルカッタに到着した人がいます。バスコ・ダ・ガマという人です。そういうところから、ヨーロッパのアジア、アメリカ大陸への進出が始まったわけです。

時代はスペイン、ポルトガルからオランダに移り、それから二百年ほどして南アフリカの突端にあるケープタウンに、オランダ人が入植しました。当時は新教徒（プロテスタント）が旧教徒（カソリック）に迫害を受けていた時代でした。オランダは新教徒を保護しておりましたから、ドイツやフランスからも逃げてきた新教徒がいたわけです。しかし、多くはオランダの新教徒の農民がこの地域に入植したわけです。その人たちのことをオランダ語で農民というところから、ブーア人とかボーア人と言われました。

アフリカの他の地域が十九世紀後半からヨーロッパの植民の対象になったのとは大いに違って、それより二百年も前にすでに植民の対象になったという特殊事情が生じたわけです。ですから、南アフリカに早くに入植したオランダ系の白人は「自分たちはもはやオランダ人ではない。アフリカ人だ」ということから、アフリカーナと自らを呼ぶよ

うになります。この人たちは、ヨーロッパから来て、前から住んでいたアフリカ人を奥地へ追いやったのですが、南アフリカ共和国は自分たちがつくった国だという主張というか、プライドを持つようになったわけです。

次にもう一つ問題がありまして、この人たちはカルビン派の新教徒ですが、選民思想という特別の考え方を持った宗派でありました。オランダ教会改革派と言われております。つまり「自分たちは、特別に神から選ばれた民であって、人間の社会の発展のためにはリーダーシップをもって、それなりの地位にあって、役割を果たさなければいけない。それ以外の人間、特に黒人はそのもとに従いながら働く、そうすることで社会は発展するのだ」という思想を持っておりました。そういう人たちが実は長い間この地域を支配して来たことが、今日のアパルトヘイトの大きな一つの原因をつくったと言ってもよいでしょう。

やがて、そのあとに新しいヨーロッパの大国イギリスがやってきました、この地域を占領するということになります。先ほど言いましたように、十八世紀から十九世紀、二十世紀前半までは、イギリスとフランスの時代でありますから、スペイン、ポルトガルの時代が去って、オランダの

時代も去って、イギリス、フランスの時代になりますと、フランスとの対抗関係から、ケープタウンにイギリスが軍隊を送って来ます。そういうことになりますと、イギリス人とオランダ人との間に戦いが起こります。その争いのとばっちりを受けるのがまた現地の黒人たちです。ある黒人民族は壊滅状況におかれたともいわれています。そういう悲惨な被害の歴史を南アフリカの黒人たちはくりかえし持ってきたわけです。十七世紀からですから、三百年、四百年の間続いたことになります。

南アフリカの白人による黒人の苛酷な差別的支配は、そういう長い歴史を背景にもっていますが、アパルトヘイトが今日のようになったのはごく最近のことです。アメリカのスタンフォード大学のフーバー研究所の教授で、レーガン大統領のブレーンだったといわれている学者たちが出した報告文書に「南アフリカは大変やっかいだ。そのやっかいの基は1948年オランダ系白人、アフリカーナと自らを呼んでいる人たちが議会で多数を制し、次から次へと人種差別の法律をつくったことから始まる」という指摘がございします。1948年のアフリカーナの「国民党」政権の確立以後、憲法が改正され、いろいろな法律が出されて、

いわゆるアパルトヘイト法体系が確立されたわけです。今、その法律が少しずつ廃止されるという方向にはなっていますが……。

例えばこういうことがあります。皆さんの顔を見ると一人ひとり違いがないように思いますが、正しく血統を調べると、昔は中国人の祖先を持っていたかもしれないし、あるいは朝鮮の人の血を持っているかもしれない。また、ロシア人の血が少し入っているかもしれないし、アメリカの血が入っているかもしれない。昔にポルトガル人の血が入ったかもしれない。そういうことを調べて、純粋に白人の血しか流れていないものに限って白人という資格を与える、それ以外の者はすべて非白人ということで、すべて差別されたのです。この時つくられた人口登録法、原住民登録法という法律はそういうものでした。

白人とその他の人種、つまり黒人だけではなく、アジア人やインド人や混血児と白人は結婚をしてはならない、性行為を行ってはならないという法律。さらに白人の学校と、黒人あるいはそれ以外の学校とを強引に分けるということもやりました。例えば、昨年日本に来ましたある亡命ミュージカルの監督で、トロンボーンの有名人が話してくれ

たところによりますと、自分の通っていた高等学校がその後指定されて白人の町になったという理由で、前からそこにあった黒人の高等学校が全部つぶされて別のところに移されるということがあったそうです。

さらに、もっともひどい法律もつくられました。南アフリカ共和国というのは、大変豊かな農業国ではありますが、砂漠もたくさんあり、そういう不毛な地域に人口の75%にあたる三千万以上の黒人を「ここがあなた方の住む所だ」と指定して、そこへ強制的に移住させるということをやりました。75%の黒人を13%少々の非常に条件の悪い電気も水道もない荒れた土地におしこめてしまったのです。このような人種差別が、オランダ系白人で差別思想を持った人たちが政権を握ったことによって言わば完成されることになったわけです。そういう状態が、1948年から今日までずっと続いています。現在、少しずつ改善の方向に向っていることは、先ほど申し上げた通りです。

さて、1966年の国連総会では「南アフリカ共和国のアパルトヘイトはクライム・アゲインスト・ヒューマニティー（人間に対する犯罪、あるいは人類に対する犯罪）である」という非難決議を全会一致で採決しました。それ以後、

この種の非難決議が今日まで二十五年間繰り返されてきました。イギリス、フランス、西ドイツ、アメリカ、北欧諸国では、南アフリカ共和国に対して経済制裁を与えるべきだということで、国連によるものとは別にそれぞれの国が制限立法をつくっています。

アメリカには共和党と民主党という二つの大きな政党がありますが、民主党がとくにこのアパルトヘイトについては厳しい姿勢をずっと持っておりまして、それが議会で多数を占めているということもあり、また共和党議員の中にも賛成する人があって、1986年10月反アパルトヘイト特別制裁法案がアメリカ議会に上程され可決されています。

これによって、アメリカは、南アフリカに進出六十年の歴史を持っていたIBM、GM、コダックなど主要な大企業が撤退しています。350ぐらいあった企業がこの間に200ぐらい撤退したと言われています。植民地宗主国であったイギリスも、メイン・バンクのバークレー銀行が二年ほど前に取り引きを一切停止するという発表をしています。

イギリスも本国で反アパルトヘイト運動がたいへん盛ん

であることは、ネルソン・マンデラー副議長が釈放された年に、ウェンブレ・サッカースタジアムに世界の有名なミュージシャンが大方集って盛大な歓迎集会が開かれたことでもよく分ると思います。日本でも衛星放送を通じて放映されたのでご存じの方もいるかと思います。

では、そういうときに日本は何をしていたかと言いますと、実は着々と南アフリカに経済進出を続けていたわけです。ある日本のフォトジャーナリストが向こうに行った時の話ですが、向こうで商社員の人に世話になって、いろいろ案内をしてもらった時のことだそうですが、公園で非常に魅力のある彫刻があって、その人はモジリアーニの絵によく似た公園の彫刻がたいへん気に入ったので「いい彫刻がありますね」と言いますと、案内にたった商社員の人は吐き捨てるように「これは黒ん坊のですよ。黒ん坊のなんかほめることはないですよ」というふうに言ったということです。その人は、思わぬ言葉を聞いて、非常に複雑な気持ちになった。あとで次第に怒りの気持ちがわいてきたと言っておられます。

現地にいる日本の企業戦士の人たちは「自分たちは一生懸命にやっている。しかも南アフリカ共和国の政府からは

1960年代から特別経済交流があるという理由で、イエローである日本人が名誉白人という名前をもらっている」と。それを大変有難いことに思って、南アフリカで日本の商社員たちは熱心な企業活動をしているわけです。おそらくそういう人たちから見ると、黒人は人間とも思えない軽蔑すべき人種で、のろまで頭が鈍くて働かない、臭いという偏見まで持つにいたるようです。私自身は黒人の友人も白人の友人もたくさんいます。私の体験からすると、体臭がきついのはむしろ白人のほうで、黒人はほとんど臭わないといってもいいと思います。黒人は臭い、白人はいい匂いがするというのは、香水の匂いかもかもしれません。私たちはそういう根拠のない偏見をもつことがしばしばありますから気をつけていただきたいと思います。

日本の商社の人たちも自分の会社のためになれかしと頑張って働いていると思いますが、南アフリカでは土地が安いので、大きな邸宅で、プールやテニスコートがあり、お手伝いさんや下男も何人かいる。その人の話ですが、黒人だけに噛みつくシェパードも二匹いたということです。

南アフリカで働く商社員は、皆さんのお父さんやお兄さんである可能性もあるし、私も能力があったら大学教師な



んかより、商社員になっていたかも知れません。そういう日本のエリートが先ほど言ったような売春ツアーに出かける。お姉さんはブランド製品を買いあさって得々とする。そういう日本人が国際社会で、外国人からどういうふうな目で見られているかということを、私たちはよく考えて見なければならぬと申しあげたいわけです。

さて、私たちは今世界一の経済力を持ち、世界の果てまで人も物も金もせっせと送りこんでいます。しかし、私は中学一年生のときに終戦を迎えましたが、そのとき日本はアメリカの進駐軍の兵士がチューインガムやキャラメルを差し出すと、私は中学生だったので手を出しませんでしたが、小学生などは先を争って手を出しました。四十五年前私たちは戦争に負けて貧乏で、しかも国際社会にまだ復帰できずに肩身の狭い思いをしていたのです。それが今日はこういう状況にあります。

ついでにここで日本の歴史を少しふりかえっておきますと、私たちは明治以来ヨーロッパの真似をし、それに追いつこう、追い越そうということでやってきました。そのときのスローガンが二つありました。富国強兵、国を富まして兵を強くする。強い軍隊を持つということがその一つで

す。もう一つは脱亜入欧、日本はアジアの一員だけれど、貧しいアジアから脱出してむしろヨーロッパの仲間入りが出来るようにしよう、そのために何でもしようということ です。

そして、満州、朝鮮、台湾を次々に事実上併合してきたわけ です。やっていた当人たちは「日本のためになることはいいことだ」と思ってやったことかもしれません。しかし、それがアジアの人たちにどうい う被害、またどうい う傷を残していったかということは、一々ここで言うまでもないと思います。皆さんは、これまで中学校、高等学校などで、その一端を学んできたと思いますから。

こうして私たちは第二次世界大戦に突入し、それが挫折して敗戦を迎えたわけ です。敗戦後、日本は「卒先して平和を追求しなければならない。したがって、日本は、これからは、軍隊を他国に送って攻め入ることはしない」と誓って、そのことを憲法の中でうたいました。そして「天皇陛下をいただくことをやめ、また制限選挙によって一部の 人 たちだけが権力をもつ政治をやめて、民主的な議会政治を やろう」ということになりました。「平和と民主主義」という言葉が、その後の日本の社会の発展に大変大きな意味

を持ってきたわけです。

そして今日、日本はあるアメリカ人の本の題名ですが、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われるようになりました。すべての人が言っているというわけではありませんが、「経済第一の国、日本」「第三の大国、日本」などという言葉がよく聞かれるようになったわけです。

数年前、日本のある総理大臣が「日本は純粋な単一民族だから、優秀な人間がたくさん生まれて今日の繁栄を迎えたのだ」という意味のことを言われました。また最近「日本経営」という言い方で、今日の日本の経済的繁栄の奇跡の理由にしています。

しかし、これらの内容をよく見てみますと、1989年の日本の経済白書にも書かれているのですが、「日本の経済は、非常に発展をしてきている。また国際社会でこれから国際国家として応分の役割を果たさなければならない。しかしながら問題もある」と、いくつか問題点を指摘しています。その一つは、物価が高いということです。フランスへ行っても、外国ならどこへ行ってもわかりますが、大変高いのです。土地が高い、家が高いということだけではなく、物価が高いのです。私などは、定年を迎えたら、フ

ランスかスペインの田舎で生活したほうがずっとゆとりある余生が楽しく過ごせるのではないかというふうに、それだけで自分の晩年を決めることはできませんけれど、そのぐらいに思っています。

また最近、過労死、突然死ということが言われています。テレビでも「24時間働けますか」というCMでおなじみの栄養ドリンクが飛ぶように売れたということです。働き過ぎということが問題にされているわけです。

そういう日本人を、私は非常にまじめな国民だと思います。しかし、その時々にくしろを振り返って考えないと、よもやと思うような悲惨な運命が待っているかもしれないということを考えなければならないのではないかと思います。

私の大学の一、二年先輩に、開高健という作家がいます。その人の作品にこういう短編があります。鼠が群をなして移動するわけです。ところが、鼠は先頭のものが東を指すと、皆それについていきます。西へ行きますと、また西へついていきます。そして最後に、ある湖に出合いますと、先頭の鼠に従ってそのまま列をつくって後もふりかえらずにみんな鼠たちは次々に溺れて、全員溺死して全滅したという話です。私たち日本人は鼠ではありませんが、明治維

新以後の日本の歩みを見てみますと、そういう鼠に決して  
ならないと言えるかどうか、私たちは考えてみなければな  
らないと思います。

確かに、私たちは貧しいがゆえに一生懸命働いて、遮二  
無二進んできました。しかし、そういう日本のあり方に批  
判的な目を向けた人がいなかったわけではありません。た  
とえば、明治時代にも二人おられます。一人は中江兆民です。  
この人はヨーロッパにも、フランスにも行っておられます。  
「イギリスやフランスは経済力をもって、その経済力ゆえ  
に強い軍隊をもって、アジアやアフリカなどの国に進出し  
ている。そして大変豊かである。日本は、今そのあとを追  
うように、真似をするように、軍隊を強くしようとしてい  
る。なんと愚かなことであろうか」と、すでに日本の近代  
化の行方に疑問を投げかけています。

きょう皆さんにお配りしたレジメのうしろに、大学に入  
学されたところで読んでいただきたい本を三冊ほど推薦し  
てあります。いずれも文庫本、新書版、ブックレットです  
から、手頃で読みやすいものです。その中に中江兆民のも  
ので、ナンカイ先生がいろいろお話をして、洋学博士がそ  
れに答えるというような話で『三酔人経倫問答』という文

庫本がありますが、現代語訳になっていますからすぐに読めます。そこにそういうことが書いてあります。

また、中江兆民のことは知らない人でも、夏目漱石のことはご存じでしょう。夏目漱石という人は、少しネクラな知識人と言われています。ロンドンに留学してノイローゼになったとも言われています。皆さんは、夏目漱石の作品というと『坊ちゃん』と『我輩は猫である』を思い起すと思いますが、もちろんそれだけ見てもなかなかの風刺作家であるということはわかるかもしれませんが、それだけでは漱石の真価は分かりません。

彼は『それから』という作品の中で、やや高等遊民的で、大学を出ても勤めずブラブラして親の世話を受け、親の勧める縁談を断って友人の奥さんに横恋慕をする、そういうけしからん男を描いています。しかし『それから』という作品は、実はそれだけの話ではありません。この作品の主人公が自分の父親の勧める縁談を断り、その結果、勘当を受けて就職のために走り回るところで終わっていますが、父親と家を継ぐ兄が当時の企業の汚職事件に連座するという話が出てきます。また主人公は、当時の東京の町が膨張していく様子をつぶさに見て、ヨーロッパと同じよ

うな真似をして安普請の家を次から次へと建てて、東京のたたずまい、環境を壊していると鋭く批判しています。つまりこの小説の主人公は、そういう父親・兄や当時の時代風潮に対してささやかな反抗をする人間として描かれているのです。

さらに、漱石には『文芸評論』という、東京大学の講師を一時していたときの講義録が残っていますが、そこにこういう話があります。十八世紀のイギリスの作家デフォが書いた『ロビンソン・クルーソー物語』をやり玉にあげてこう言っています。「ロビンソン・クルーソーのごときは、山羊を食うことや、椅子を作ることばかり考えている。まったくの実用的機械である。」と、この「実用」という言葉と「機械である」という言葉は、十八世紀のことですから、今から三百年前になりますが、すでにそういう言葉で批判しているのです。「クルーソーを作ったデフォーもやはり実用的機械である。彼の作品にはどれを見てもクルーソーのような男ばかり出てくる。そしてこれがイギリス国民、一般の性質である。彼らは頑強である。しかし、神経は愚鈍である。また实际的である。彼らの仕事は皆クルーソー流に成功している。南アフリカを開拓した手際は、まさに

このクルーソーのやり方である。彼らはクルーソーをもって生まれ、クルーソーをもって死する国民である」と酷評しています。イギリスは紳士の国として日本は見習って来ましたが、近代における経済的発展・国民的隆盛を先駆的に実現したイギリス人を、漱石はロビンソン・クルーソーにみたてて「これは文化的人間ではない。実用的機械にすぎない」と言っているわけです。前にも指摘しましたが、実はそれと同じことを1920年代にフランスのある作家は「ホモ・エコノミスト」（経済人間）あるいは「自働機械」と呼んで鋭く批判しています。

私たち日本人はヨーロッパに追いつけ、追い越せということまでやってきました。そして今回の湾岸戦争を、私たちは経験しました。皆さんもテレビで嫌という程見せられたと思います。私は大学で「アフリカ中東研究」という、講義を担当しているものですから、それほどの専門家でもないのに、新聞や地元のテレビなどで何度かコメントを加える破目になりました。結局、アメリカを先頭とする多国籍軍が悪者フセインを懲罰することに成功するという事で結着します。

この間、私はたくさんの中東やイスラーム関係の本を読



みましたし、専門家の話も出来るだけ聞いて、いろいろ情報も交換しました。また3月10日には、加藤周一先生、西川潤先生、板垣雄三先生らに来ていただいて、「脱冷戦・湾岸戦争後の世界」と題するシンポジウムを開きました。そこで先生方も指摘されましたし、私もつねづねそう思っているのですが、今日私たちは地球的規模の国際化の時代にあるにもかかわらず、物事をアメリカの方だけから見、あるいはヨーロッパの価値観で判断するということにすっかり慣れてしまっていないでしょうか。欧米的なものの見方や価値観というものが人類の唯一の価値であるかのよう、私たちは思いがちではないでしょうか。これはこれからのグローバルな世界の行く末を考えると、大変危険なことではないかと思うのです。

東西冷戦時代が終わり、多極的多元的な時代になりつつあります。そして私たち日本人は、地球上のすべての人たちとこれから付き合っていかなければなりません。またそれが好むと好まざるとに拘らずこれからの日本の生き方になると思います。なかでも私たちがとかくこれまで軽視してきたアジアの人たちと仲良くしていかなければならないと思います。しかし、今でも私たちは「脱亜入欧」という

明治以来掲げて来たスローガンに動かされていないと果して言えるでしょうか。アメリカとソ連が、第二次世界対戦後の世界の政治を大きく支配してきた時代はようやく終わろうとしています。アメリカもソ連なき後一極支配を続ける力はもっていないと言われていました。この一、二年は別にして、二十一世紀を生きる皆さんにとっては、そういう時代が必ずやって来ると思います。

皆さんは、これから大学でいろいろな先生から優れた知識、考え方を授かることになると思います。また皆さん自身も、それを受けていろいろ自分で勉強していくことになると思います。大事なことは二つあると思います。

一つは、皆さんは大学生であります。大学に行かない人もいるわけです。しかし皆さんは大学に来たわけです。何のために来たのか。動機はいろいろかもしれませんね。皆が行くから行くのだという程度かもしれません。親が行けと言うから来たのかもしれません。あるいは花園大学で勉強したい、仏教の勉強をしたい、あるいは福祉の勉強をしたい、あるいは東洋思想の勉強をしたいという思いで来た人もたくさんいるかもしれません。大学生であるということは、私は日本のそれぞれの分野の優れた指導者になると

いうことは、同時にすぐれた知識人でなければなりません。知識人であるということはどういうことか。それはこれまでの人類がつくりだしてきた知恵というものを身につけながら、その知恵を乗り越えていく人にならなければならないということです。そのためには批判的な観点というものが必要になります。知識人というのは、豊かな常識と共に批判的な観点を常に持っている、つまり自立した人生観と世界観を培う人間であるということです。皆さんは、高校までのように先生に教えてもらったものを頭に一生懸命覚えて答案に書くという生活から一歩ずつ抜け出さなければならない。これからは、そういう運命を好きでも嫌いでも担うことになります。

しかし私自身の経験でも、物を批判的に見るということは簡単なようでなかなか大変です。なぜならそれはこれまで承認されて来た、あるいは自分でもそう考えて来た物の見方で物を見るということを疑う、あるいはやめるということだからです。世の中にあるいろいろな考え方、その中には誰もがそうだとやっているいわゆる常識もあります。しかしそういう常識も、「もしかしたらこれは違うかもしれない」と常に疑ってみることが学問では大事なことになる。

るのです。

たとえば、フランスのデカルトという哲学者は『方法叙説』という本を書いて、欧米近代の個人的合理主義を拓いた人と言われています。何よりもこの人の偉いところは、これまでの学問をすべて疑うということから始めた点です。そのために彼はあえてこれまでの学問のことばであるラテン語で書くことをやめて、いわば京都の田舎の言葉であったかもしれない、そういう俗語で学問的論文をまず世に問うたのです。普通ならそのことだけで学者として失格していたかも知れないのです。

実は、そういう勇氣ある人と言えば格好がいいのですが、言わば非常識なことをやってのけた人が、私たちの近代社会の基礎を思想的につくりあげてくれたのだということも思い出していただきたいと思います。今日、皆さんが幅広い知識と批判的観点を常に持つためには、たとえば私たちはアジアに位置しているのですから、アジアの人たちの心、生き方、考え方を素直に受け止めるということができなければならぬのではないのでしょうか。

最近、外国人労働者がたくさん日本に来ております。しかも法律上の制約がありまして、「不法就労者」と呼ばれ

ている人たちがたくさんいるということです。日本には朝鮮から強制的に連れてこられた人が、二世、三世、四世というふうにおられ、日本に帰化した人もたくさんいます。また日本には北海道の先住民であるアイヌの人たちもいますし、沖縄の人たちもいます。決して単一な民族ではありません。数が少ないからそうではないということは、数の少ない人たちは無視しても良いということで、大変失礼であります。数の少ない人たちの生活も意見も大事にしていくというのが民主主義であります。身障者の方も、そのハンディキャップを背負って生きているわけです。そういう人たちにたんに同情するのではなく、お互いに尊重し合い、励まし合って生きていかなければなりません。手を差し延べるということだけがその人を励ます一番良い方法とは限りません。そのためにも経済利益や開発優先ではなく、人間を大事にする社会をみんなの力で、知恵でつくらなければなりません。

くりかえしますが、今日地球規模の国際化時代と言われます。皆さんはおもに日本を対象にした学問を大学で勉強されるかもしれませんが、その学問を豊かにするためにも、皆さん自身の視野を広げるためにも、ぜひアジアのどこの

国でもいいですから、リュックサックを背負って、バックというものではなく、自分ですべて手続きをして出かけて行ってほしいと思います。もちろん治安その他も十分調査をして下さい。しかし、若いのですから多少の冒険はして下さい。冒険というのは、高い山に昇ったり、川を下って奥地を探検するというのではなく、もちろん観光地や繁華街を見て歩くというのではなく、皆さんと同じような若い人や普通の人たちが生活しているところに出かけて行って、出来ればその人たちとしばらくは一緒に生活し、言わば喜怒哀楽を共にする経験をして来て欲しいと思うのです。そして、そういう異文化体験を通して、御自分を試し御自分を鍛え、御自分の可能性を大きく広げて欲しいのです。また他国との関係の中に、支配＝被支配の関係をではなく、相互依存＝共生の関係をこれからはみんなで創っていかねばならないと思います。新しい世界の創造、新しい文化の再生は、多様な異文化の接触・交流・複合の中から生まれることを、私たちの人類の歴史は教えてくれています。若い皆さんがそういう積極的な、視野を広く持つ大きな人間に育っていかれることを心から期待して、大変雑駁な話しだったと思いますが、皆さんの御入学に向けての私のさ

さやかなはなむけの言葉とさせていただきたいと思います。

'91年度新入生オリエンテーション講演より（4月8日）

（文責在編集者）

# 日本の国際化とアパルトヘイト（レジメ）

花園大学・1991年4月8日(月) 片岡 幸彦

## I、日本の国際化の現実

- 1) 1000万人の海外旅行者
- 2) 2兆ドル近い海外資産
- 3) 黒字1000億ドルの対外商品輸出

## II、日本的国際化への国際的非難

- 1) 売春ツアーと高級品嗜好
- 2) 土地・不動産の買い漁り
- 3) エコノミック・アニマル

## III、アパルトヘイトと日本

- 1) 地球上最後の植民地・南アフリカ
- 2) 国連の非難決議から25年
- 3) 対南ア貿易額世界第一位

## IV、明治の「近代化」から「国際国家日本」の登場まで

- 1) 「富国強兵」と「脱亜入欧」
- 2) 大二次世界大戦と敗戦



3) 「平和と民主主義」

4) ジャパン・アズ・ナンバーワンと「日本的経営」

#### V、人間（人権）を大事にする地球社会の実現

1) 民族・人種差別を克服し、異民族・文化と積極的に交流しよう！

2) 批判精神を培い、自立した人格を育てよう！

3) 支配＝被支配の関係から相互依存＝共生の関係をみんなで創ろう！

#### \*お奨め図書3冊

①加藤周一：「雑種文化、日本の小さな希望」、講談社文庫（380円、1974年、講談社）

②グワングワ・片岡：「アマンドラ、南アフリカからのメッセージ」、かもがわブックレット31（450円、1990年、かもがわ出版）

③西川 潤：「世界経済入門」第二版、岩波新書157（580円、1991年、岩波書店）